



episode.07

未来に継承する土作り百姓

話し手 (有)東馬場農場 代表取締役
ひがしはら しん
東馬場 伸さん (昭和25年12月21日生)

聞き手 鹿児島県立加世田高等学校 2年

子どもにつなぐ米作り

元々は、葉たばこを栽培してたね。はじめて米を作ったのは 30 歳くらいだろうね。農業体験をしたいちゅう中学校の女の先生がいてね。まあ、依頼っちゅうか、「子どもたちをどうにか自然の素直な心に育てよう」と。田植えが終われば寒い日も暑い日も雨の日もあるがね。それでも、すこしずつ大きくなってくる。3、4本しか植えないのよ。お米は。でも、収穫するときはね、最低でも1本が10本になる。ビックリするわけだろ、いくらやんちゃ坊であろうと、農業が嫌いであろうと。やっぱその成長の喜びっちゅうか、やればできるんだってね。やっぱそこをね、子ども達にはなんとか、こうわかってもらえないかなと。そういうことで、米を今は子供たちと。

一年を始める早場米

1年の流れからいえばね、種もみを10℃の水で10日間。1月の10日前後、42~43℃でもみを消毒。1月の22、23日に種まき。3月の10日前後にはもう田植え。中学生の子ども達と田植えして、収穫を7月の14~15日、というのは、ここには目標があるわけ、1学期の学校最終給食が18、19、20日なのよ。どうしても新米を間に合わせるということで。だから、おじさんの場合は、そこが米のスタート。

自然を相手に土を相手に

農業という言葉は現代的な言葉だがね。だけども本来の姿っちゅうのは、農業というのは立派な仕事、百姓というのは昔の作業性と変わらない、自然を相手に土を相手に。だからその基本を崩しちゃならないと思う。やっぱ我々は「ドン百姓」だよと。

百姓っちゅう土にまみれる姿がね、自分たちの年代までは合っているのではないかと。



より良い米を作る

まだおいしいものを作りたい。消費者は食料として、「パンもあるけども日本は米だよ」と。「これ以上においしいものはないという」ぐらいね。そこがやっぱ自己満足じゃなくて消費者がおいしいと言われるものを作りたい。だからそのためには努力しかないと思う。



聞き書きコラム

中学生 稲作体験



東馬場さんが地元の中学生に対して行っている稲作体験は、総合的な学習の一環として行われており、その目的は地域の産業を学び、農業の現場を知り、地域の方々との触れ合いを深めることである。生徒は田車による除草や鎌による稲刈り、手で植える田植えなどを体験する。ここで収穫された新米は、南さつま市内の小中学校・養護学校の学校給食に提供されている。